2023（令和5）年度　第3回初任者 SD 研修
「大学職員として何ができていて、何ができていないのかを考えてみる」
開催報告

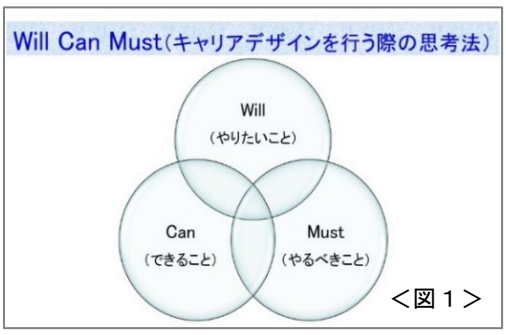
日　　時：2023（令和5）年 12 月5日（火） 14:00～17:00、情報交換会 17:10～18:00
会　　場：キャンパスポート大阪
（大阪市北区梅田1-2-2-400 大阪駅前第2ビル4階）
講　　師：近藤　智彦 氏（学校法人愛知大学　理事長付参事）
宮原　秀明 氏（研修部会推進委員会　委員長、大阪学院大学　大学事務長）
葛西　崇文 氏（研修部会推進委員会　副委員長、大阪女学院大学　教務・学生課　課長）
受 講 者 数：7大学 12 名　※申込者数は左記に同じ
内 容 詳 細：大学コンソーシアム大阪 HP 掲載の「シラバス」参照
実 施 結 果：同上掲載の「受講者アンケート」参照
企 画 ・ 運 営：大学コンソーシアム大阪 研修部会推進委員会

今年度の第3回初任者SD研修は、キャンパスポート大阪を会場に対面にて開催した。はじめに葛西副委員長よりプログラム内容について説明があり、「“他者と気づきを共有することでさらに新しい気づきを得ること”、“新しい前向きな行動計画を立案すること”が本研修の目的である。本日はそのためにまず自身の取り組みを明確化し、続いてグループワークにおいて傾聴とフィードバックを実践して気づきを深めていただく。ぜひ楽しみながら学んでほしい。」との挨拶があった。

続いて「職員生活を振り返って皆さんにお伝えしたいこと」をテーマに、各講師による講演が行われた。概要は以下のとおり。

■近藤講師

先日、愛知大学事務局長を任期満了により退任し、理事長付参事となった。35 年間の職員生活は予測できないことも多く、困難と苦難の連続だった。だが「難」の有る人生は、「有難い」人生でもある。キャリアデザインを行う際に Will（やりたいこと）/Can（できること）/Must（やるべきこと）という思考法＜図1＞があるが、この 3 つの円の重なったところを目指すとよいと言われている。入職間もない頃の私は希望した業務と組織から与えられた業務が異なり、3 つの円が重なる部分を見つけることはできなかった。ある時、自らが置かれた環境は変えられないが、組織から与えられた業務に一生懸命取り組むことにより Can の部分が大きくなり、その結果 Will（やりたいこと）も Must（やるべきこと）もできるようになることに気が付いた。できることを増やせば「強み＝軸」ができて周囲から認められ、道は開ける。自ら主体的に動き、Can の部分を大きくすることにより可能性が広がっていく。また、自身は仕事の五箇条として「明文化・組織化・共有化し、やり抜くこと」、「対話・説明」、「理解を深め納得してもらうこと」、「たとえ一人でも行動を開始し、周囲を巻き込むこと」、「不断の見直し」を心がけているが、これは取り組みを実現し、浸透させるためのポイントでもある。そして多角的視野獲得のために「人」と交流し、知識の獲得・蓄積のために「本」を読み、考え方や自大学の相対化のために「旅」（他大学職員等との交流）をすることを勧めたい。この「人・本・旅」は、立命館アジア太平洋大学の出口治明学長の講演で聴いた学びの方法である。私にも当てはまる方法であったので、皆さんにも紹介する。また、自らは明日に向けた行動計画として、や



＜図１＞

さしい日本語認定講師の資格取得に挑んだ。大学の置かれた環境や社会的背景に鑑み、今後は外国人や配慮が必要な人が暮らしやすい社会を作るためにも尽力したいと考えている。

■宮原講師

現職は大学事務長であるが、入職当初から事務職員としての素養の無さに苦悩した。振り返ると学生時代に真剣に取り組んだことや、得意なことは、あらゆる場面で役立っていると感じる。これまでの経験を振り返ると、苦手を克服してきたというより、むしろ得意をできる限り活かすことができるよう取り組み、アウトプットした結果が今に繋がっていると感じる。自らのターニングポイントは「本との出会い」、「大学院進学などの経験」、「人との出会い」にあったと感じている。本を読んで理解できたことや共感したことを実践してみることで変化を感じ、大学院ではさらに学び考えて行動するきっかけをいただいた。また、様々な経験を積むための機会は人を介していただいてきたと実感している。皆さん、日常の業務の中では様々な問題に対峙されていると思う。皆さんの目の前に問題があるなら、その問題に関する事実をできるだけ多く集め、解決方法をできるだけ多く考え、どの解決方法を選択するかを決めて、実行するという手順が肝要である。加えて、学生にも教職員同士でも社会との繋がりの中でも、どんな場面でもほんの少しの気遣いと興味を持って相手に接することが大切だと思う。是非、様々な妨げに打ち勝ち、自らが快いと実感できるような努力を続けてほしい。

■葛西講師

大学卒業後、数年のブランクの後、青森の児童相談所勤務、大学勤務を経て、2021 年に現在の大学に入職した。青森では 2012 年に四国地区大学職員能力開発ネットワーク（SPOD）の活動を知ったことをきっかけに、10 年近い年月をかけて SD 活動に取り組んできた。最終的には、職員像を設定したうえで、4 種の SD を 1 年間で体系的に実施、また SD 図書の購入や配架、資格取得等の補助を行った。また、プロジェクトチームを運営し、その憲章を明文化、北海道・東北地区 No.1の SD 活動拠点となることを目指した。結果、苦労はしたが「全職員が参画しやすい“楽しい”SD 作り」、「段階的に実施し、都度その効果をアピールすることによる活動の拡大・定着」、「SD マップ等の明文化による活動の持続性の担保」の 3 点を成し遂げた。そして、それでも苦労していることとしては、「必ずしも自身の成長を望む職員ばかりではないこと」、「様々な業務に追われ、SD 活動継続のエネルギーが枯渇しやすいこと」、「説得力を増す努力や巻き込みやすい企画を講じてはいるが、他人の思い込みや先入観を壊しにくいこと」が挙げられる。認知心理学の観点からも、そもそも他者の思い込みや先入観は打破しにくいものであるため、このような課題解決のための選択肢を増やすことが肝要である。そのためには知識を増やし、他者の考えに触れ、失敗事例を分析することが有効であり、本日の研修がその一助になれば幸いである。

講演終了後、以下の通り質疑応答が行われた。

＜質問1＞前向きではない人を動かすことが難しいと感じている。前向きな議論を行うためのマインドセットはどうすればよいか。

＜回答1＞まずは自らが担当する業務を十二分に遂行することが肝要だと思う。すると実績に裏打ちされ、説得力が増すので、その後、機会を捉えて提案等を行うことを勧めたい。（葛西講師）

自らも心掛けているが、前後左右（前：未来、後：過去の経緯、左右：他大学など参考となる他者・法令やルール）を押さえて提案することを勧めたい。これにより物事は前に進むと実感している。（宮原講師）

よく似た話にはなるが、立命館アジア太平洋大学の出口治明学長の講演で、縦（歴史）・横（社会全般や他大学）・算数（事実やデータ）を踏まえることで説得力が増すことを教えていただいた。迷っ

たときは上司に相談すべきではあるが、担当者だからこそ気付くこともあると思う。大学組織をよくするためにも、それを大事にしてほしい。（近藤講師）

＜質問2＞近藤講師は自大学ではスタッフポートフォリオの導入はされていたのか。
＜回答2＞人事担当者間での職員情報の共有と、職員それぞれの業績や得意を伸ばすことを考えて、キャリアビジョンシートを用いた愛知大学独自の人材育成システムを構築したが、その際にはスタッフポートフォリオの要素も組み入れた。（近藤講師）

＜質問3＞葛西講師は現在、青森式の SD を行っているのか。
＜回答3＞まずは学外や青森での活動を踏まえ、実績を作っているところである。風土の違いもあることから、大阪での実施には、まだ時間をかける必要があると感じている。（葛西講師）

続いてのグループワーク、ペアワークでは、4 名1組のグループにて自己紹介を兼ねたアイスブレイクの後、事前課題を踏まえたペアワークにて、①今年度前半の振り返り、②できていることの共有、③できていないことの共有を行った。さらに、各自①～③を踏まえた「気づき」をワークシートに記入のうえ、グループワークにて共有と意見交換を行った。

グループワークの様子

その後、研修全体についての感想共有と質疑応答を行ったところ、受講者からは「異なる大学、異なる部署の職員との情報交換や交流ができたことがよかった。」、「本日の講演を踏まえ、自身の業務も見直したい。」等の感想や、自身の業務にかかる具体的な質問があり、これに対し各講師より個別にアドバイスが寄せられた。

最後にワークシートを用い、明日に向けた行動計画の作成と共有を行った。まとめとして近藤講師より、「前向きな行動にあたっては、まずやってみる（チャレンジしてみる）ことが大切であり、未完成のものを繰り返すことによりクオリティは上がる。失敗をしたという経験値も大事である。」旨の共有があった。

閉会挨拶として、宮原委員長より、「本日のように業務について聞いてもらう経験、興味関心を持って聞く（傾聴する）経験はどちらも大事であり、貴重な機会だったのではないだろうか。また本日アウトプット（明文化）したものは、ぜひ持ち帰って再確認し、今後の計画に役立てていただきたい。“やってみて修正する”ことを繰り返すことが大事であり、本日の講座を踏まえてぜひ行動してほしい。行動により変化は訪れるはずである。」との言葉があった。

研修本編の終了後には、受講者と講師による情報交換会が開催され、大学を越えたネットワーキングが図られた。また、希望者には「受講証明書」が配付された。

以上

情報交換会の様子